

書評

看護師が行う 意思決定支援の 技法 30

患者の真のニーズ・価値観を
引き出すかわり

看護師が行う 意思決定支援 の技法 30

患者の真のニーズ・
価値観を引き出す
かわり

川崎 優子

はじめに、
感情を共有する

——そこから患者の抱える課題や価値観がみえてくる

医学書院

- 著 川崎優子
- 定価 本体 2000 円＋税
- 発行 医学書院

評者

医療法人社団新国内科医院 看護師長
がん看護専門看護師
宇野さつき

意思決定支援とは？ 寄り添うとは？ が具体的に理解できる 1 冊

本書『看護師が行う意思決定支援の技法 30』の一番の印象として、私は、単なる「意思決定支援」だけでなく、「看護師がケア提供者として患者・家族に『寄り添う』」ということは、つまりどのような看護実践であるのか？」を分かりやすく具体的に示しているのではないかと考えた。

地域包括ケアの時代—さらに 重要性が高まる意思決定支援

私は外来と訪問看護を通し、がん患者だけでなく、認知症や難病、慢性疾患の患者に関わっている。がんをはじめ治療が外来中心となり、入院期間の短縮に伴い、ますます地域側の対応の重要性を感じている。

疾患や障害を抱えながらも、いかに「生活者」として住み慣れた地域での暮らしを支えていくかという課題には、地域包括ケアをはじめとする連携・サポートシステムは欠かせない。しかしそれ以前に、さまざまな価値観やニーズを持つ患者・家族が「どのように過ごしたいか？」「何を大切にしたいのか？」を理解し、それに沿ったケア・マネジメントを行っていくことが必須になる。医療的な側面だけでは解決できない課題について、患者の身体や病気・障害、生活のことも分かり、ケアの実践を行う看護師は、まさに地域ケアの要であり、意思決定支援は大切な役割だと考える。

訪問看護では、看護師は 1 人で患者宅や施設に向向き、さまざまな視点でアセスメントを行いつつ、患者の意向を尊重し、ケアの提供とともに、周囲との調整も行わなければならない。本書の中で特に基本となる「感情を共有する」「相談内容の焦点化につきあう」「身体状況を判断して潜在的な意思決定能力をモニターする」というスキルは、訪問看護にとって、ケアの提供や患者・家族との信頼関

係を築く上でも欠かせない。

本書の特徴は、著者の長年の丁寧な看護実践と研究、教育活動をもとに、理論的な背景から、具体的な声のかけ方まで、実践者でも理解しやすいように工夫されていることである。相談業務を行う看護職だけでなく、実践経験の少ない病棟看護師や訪問看護師でも、実践事例を参考に、本書を片手に患者・家族に意思決定支援を行っていくことができる。

ケアの振り返りやスタッフ教育時の 指標としても活用可能

管理・教育者の立場からは、例えばケアカンファレンスや事例検討での振り返り、スタッフ教育の際に、どのような点はできていて、どのような点が不十分なのかを系統立てて具体的に確認するための指標としても活用可能だと思った。

スタッフが患者の立場や自分の看護実践の意味を理解し、次に根拠をもって意図的に取り組めることで、管理者はケアの質向上につなげていけると考える。余談ではあるが、本書の「患者・家族」をそのまま「スタッフ」に置き換えると、スタッフの意思決定を支援する管理者への示唆になるのではないかとも思った。

患者・家族の感情を受け止め、意思決定プロセスに寄り添っていくためには、スタッフの「気持ちのゆとり」と、関心を向けるための「モチベーション」は必要であり、本書は管理者としてのスタッフ・マネジメントがより重要であることを、私が痛感する機会にもなった。

管理者の皆さまには、ぜひ一読をお勧めしたい。